

武蔵野日曜聖書講筵

万軍の主

——詩篇第84篇——

1968年1月7日

小池辰雄

新しい踏み出し 万軍の主 大自然の如く 汝の生命を焦がれ慕う 即身即主 わが力はなんじにあり 祈りは「主さま、アーメン」 神との靈交 力の使徒パウロ 聖霊の力の中にある希望 復活の力 救い上げていく力 油そそがれたる者 キリストの碎けを賜る 現在を永遠として 人、信なくば立たず

【詩篇84】

聖歌隊の指揮者によってギテトのしらべにあわせてうたわせたコラの子の歌

1 万軍の主よ、あなたのすまいはいかに麗うるわしいことでしょう。

2 わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、

わが心とわが身からだは生ける神にむかつて喜び歌います。

3 すずめがすみかを得、

つばめがそのひなをいれる巢を得るように、

万軍の主、わが王、わが神よ、

あなたの祭壇のかたわらに

わがすまいを得させてください。

4 あなたの家に住み、

常にあなたをほめたたえる人はさいわいです。

5 その力があなたにあり、

その心がシオンの大路おおじにある人はさいわいです。

6 彼らはバカの谷を通つても、

そこを泉のある所とします。

また前の雨は池をもつてそこをおおいます。

7 彼らは力から力に進み、

シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。

8 万軍の神、主よ、わが祈をおききください。

ヤコブの神よ、耳を傾けてください。

9 神よ、われらの盾たてをみそなわし、



あなたの油そそがれた者の顔をかえりみてください。

¹⁰ あなたの大庭にいる一日は、

よそにいる千日にもまさるのです。

わたしは悪の天幕かどもりにいるよりは、

むしろ、わが神の家の門守かどもりとなることを願います。

¹¹ 主なる神は日です、盾たてです。

主は恵みと誉ほまれとを与え、

直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。

¹² 万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです。

●新しい踏み出し

私たちの生活は、年ごとにになにか決意をさせられるということは決して単なる形式ではないと思う。私も元日を期して新しい踏み出しをしたつもりであります。普通の教会ではよく元日に集会をし、早天祈祷とか何とかやりますが、いつかそういうことをするかもしれませんけれども、この第一日曜の1月7日までむしろ各自が静かに正月を迎えて、極めて内的に個人的に新しく祈りだして始めるということも非常によいことだと思っているわけです。

いろいろ年賀状を皆さんからいただきましたが、一々お返事を差し上げなかったと思いますので、まとめて恐縮ですが、まことにありがとうございます。年賀状というのは、それは受けとればうれしい。ただ全然印刷ばかりなのはあまりうれしくない。せめても自分のお名前くらいは自筆で書いてもらいたい。私は自分の名前は――事務的な「曠野の愛小池辰雄」というのは彫ってありますけれども、そうでない限りは決して名前は彫らないで、必ず書いているつもりでございます。しかし、心のこもった、たった一言でもありますと、それは非常に響くものです。皆さんのほみなそういうものであったと思っておりますけれども。

私は元日にゲーテの夢をみて、2日には乃木大将の夢をみた(笑)。どういふことかなあと思っているのですが。昨晩は祈祷会の夢をみて、ある人が涙をそそいで顔がガリリと変わってしまった、他の連中に「この通り変わるんだ」というようなことを言ったり、私ももちろん祈祷会で恵まれたものですから、野原に出たらスーツと身体が上がってしまった、自由に空中を飛び回るわけです。なんと不思議なことかなあと思った。昨日はそんな夢をみた。

では、詩篇84篇に入りましょう。詩篇84篇というのは、詩篇150篇の中から選り出して十指を数えるならば、必ずその十の指の中には入ってこなければいけないような詩篇です。あるいは五指の中に入ってくるかもしれません。ことに年頭において新しく踏み出そうと



いうときには非常にふさわしい詩篇だと思ったわけです。

特に今朝方ちよつとテレビを見ていたら、ソ連の50周年とかで、もの凄い軍隊がどえらい武器を展開している映像があった。あんなのをぶつ放されたら、日本はひとたまりもないと思うようなわけです。けれども、私たちがそのような武力に屈しないところのものを持っていないはいかん。全く20世紀後半は危機的な世界であります。そのときにこれらの世界に処していくのに、今の仏教徒も、今のキリスト教徒も果たして昔の本当の念仏者、また本当の殉教を遂げていったようなキリスト者たちの、それだけの魂であるかどうか。我々自身の問題として――ひとつことではない――いい加減な信仰なら、ない方がましで、信仰というならば本ものでありたいと。そのことを詩篇84篇は私たちに呼びかけてくれている詩篇だろうと思うのです。

●万軍の主

詩篇第84篇 聖歌隊の指揮者によってギテトのしらべにあわせてうたわせた コラの子の歌

この詩篇はいつごろできたかというような問題も、学者によつてさまざまでありまして、捕囚期以前であるとか、ちようと捕囚期であるとか、あるいは、捕囚期を過ぎた後であるとか、有力な学者がいろいろに言っているのです、どうにもならん。けれども、私の想像するところによると、大体、捕囚期のバビロニアに囚われた頃の歌ではなからうかと思う。紀元前7世紀頃でありましょう。

1 万軍の主よ、あなたのすまいはいかに麗うるわしいことでしょう。

2 わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、

わが心とわが身からだは生ける神にむかつて喜び歌います。

3 すずめがすみかを得、

つばめがそのひなをいれる巢を得るように、

万軍の主、わが王、わが神よ、

あなたの祭壇のかたわらに

わがすまいを得させてください。

4 あなたの家に住み、

常にあなたをほめたたえる人はさいわいです。

シオンへの非常に深い憧憬の念、慕いの念がまざまざと歌われている。4節ずつがひとつのまとまりになっているように思われます。

この詩篇84篇に、「万軍の主」と言われている呼び方がここに4回出てきます。「ヤーヴェーツェバオート」という。それで今日の題は「万軍の主」としたわけです。この「万軍の主」とか、「万軍の神」とかいう言い方は、サムエル書、列王記略、預言書、詩篇などに出てきます。



ももとはつきりと軍隊のことがこの「万軍」なんです、それが預言書あたりになると、だんだん霊的な意味に変わっていきまして、天の霊的な実在、存在者、天使あるいは聖徒の群、こういったものが「万軍」という内容です。私たちにとっては、この「万軍」というのはまさに天界の霊的な存在者、また預言者、使徒たち、世々のまことのキリスト者たち、これを「万軍」と言いたいわけであります。

「あなたのすまいはいかに麗うるわしいことでしょう」

というところは文語訳では、

「あげぼりなんじの帷幄はいかに愛すべきかな」

となつてゐる。私は実は文語訳の方が好きです。「帷幄」と訳してあるのはまことにいいので、これは英語でいうと「タバナクル」です。「すまい」という訳し方ももちろんできます。けれども、「幕屋」、聖なる幕屋です。イスラエルの民がモーセに率いられて荒野を旅したときに、神が幕屋にくだつて共に歩いてゐた。「出会いの幕屋」という。そういった神との出会いの幕屋、神との会合の幕屋です。

「汝の幕屋はいかに麗うるわしいことであるか」

と。私が実は「幕屋」ということを言い始めた人間ですけれども。いや、なにも私が言い始めたのでも何でもありません。聖書にちゃんと始めから終りまで書いてある。「幕屋」というのは即ち、動的な意味を持つてゐるので、「宮」とか、ただ「家」とかいうよりも非常に生命的な気持を与える。宗教もいわゆる神殿宗教となつて大神殿ができてしまつたり、大伽藍ができてしまつたりすると、形式的になつてしまふ。そして、宗教の内面性がむしろ涸渇して形式化してくるのは、もう東西の歴史において見るがごとしです。

●大自然の如く

内村先生の言葉に、

「自分の教会は、神の宮は、大空がその天井であつて、青草がその床である」

というような言葉がありますが、さすがに内村先生はそういった大自然を非常に愛しました。

大体、大自然を愛さない魂はダメですね。私は正直、とにかく大自然の如くありたいと思う。嵐が吹いたらば、自分も嵐の心にならなければダメなんです、「嵐は恐い」なんていうのは。ベートーベンというのは、第六シンフォニーである有名な「田園交響楽」をつくつた。あそこに小川のせせらぎのような細やかな音と、それから嵐、雷——ドカーンと落ちるあの太鼓を打つのは大変なことだろうと思うけれども——非常にいろんな面が出てくる。ベートーベンというのは、レンブラントでもダビンチでも皆、そういう面を非常に強く多面に持つてゐる。

この多面性というものは、なにも人物が大きくなかつたつて、いや、自分をからつぽにす



るとこれが出てくるんです。私みたいに、生まれつき少し弱虫のダメなやつが、自分からっぽにだんだんされていきますと、もの凄い充実が逆にやってくる。ゲートなんていうのもそうです。微風が吹いていたならそよ風の如き気持。無風だったら絶対沈黙のような在り方。武者小路実篤の、

「花言わず我また言わず」

という句がある。

「花も言わない、自分も言わない」

という無言の間に相通ずるものが出てくる。無風帯においての充実さというものもある。どれであつてもいい。

皆さん、祈りも嵐の如く祈つたり、あるいはそよ風の如く祈つたり、また、沈黙で祈つたり、どれでも自在にならなければダメですよ。

「あの人はばかに烈しく祈つたりする。あんな祈りをするから、私はもうあの集会はごめんだ」

なんてね。人が嵐の如くに祈つたら、その嵐の祈りに自分の気持を和していく。そよ風の如く祈つたら、そよ風に和していく。そういった自在なことになったらもう、

「一切の秘訣を得たり」

ということですよ。どうぞ、皆さんは――人間の性格というものはいろいろありますから。

「その人はこのように、あの人はあのよう」

で結構です――しかし、それに自在に和するということが可能なんです。ダメなやつにこの可能が出てくる。この可能は、この詩篇の中にも出てくるから、だんだんやりましょう。

● 汝の生命を焦がれ慕う

「万軍の主よ、あなたのすまいはいかに麗うるわしいことでしょう。

「その幕屋は麗しい」と。「いかに愛すべきかな」という訳の方が、「麗しい」よりもいい。ヘブライ語の使い方がいいですよ、と、

「万軍のエホバよ、なんじの帷幄あびばりはいかに愛すべきかな」

と、「慕わしい」という意味です。

「わが魂は絶えいるばかりに主の大庭を慕い、

これは非常にいい訳です、この「絶えいるばかりに」というのは。前の方にもそう書いてある。自分の心が焦がれるようにということ。焦がれ、焼けるような、そういった慕い。「わが魂」と言い、それからその後に、「わが心、わが身からだ」と言っているでしょ。魂も心も身もというわけで、全存在がこの生ける神に向かって喜び歌うという。

わが心とわが身からだは生ける神にむかつて喜び歌います。

こここのところに「主の大庭」とある。神殿の前に庭があるわけです。そういう具体的な表



現を言いながら、それは実は何を意味しているかというところ、一番終りの言葉が大事なんです。

「生ける神にむかつて喜び歌う」

という。なにもその場所そのものをどうの言っているのではない。その場所をしてその場所たらしめているところのもの、即ち「生ける神」という。こちらは心であり、魂であり、身である。これは生きなければどうにもならん。

「その慕うものは、その本当の魂を持ち、本当の心を持ち、本当の身を持つて
いるあなただ」

というわけです。神の心、神の霊、神の実体、そういった生ける神に向かって慕う。生命は生命を呼んでいるわけです。我々人間は生命だからね。生命が本当の生命にぶつからなければ、実はどうにもならないようにできている。

「わが魂は汝のうちに休らうまでは安きを得ず」

とアウグスチヌスが言ったけれども、わが身も魂も心もみな、汝のうちに休らうまでは、汝の生命を生命とするまではどうにもならん。これが本当の、「焦がれ慕う」ということなんだ。

これは人間はふだん大体、割合に元気にやっているものだから、気がつかないでいるけれども。はやく本当にこのような生命を慕う心に、身に、魂に在る人が勝ちですよ。普段、本当にこれをやっていないと、いざというときにうろたえてどうにもならなくなる。我々の地上の生涯には限界がありますから。しかし、限界、有限の中に無限を既に宿しているような在り方、これが何といったって本当じゃないですか。

そのことを「宗教」なんていう言葉でいうものだから、

「まあ、宗教はちよつと待つてくれ」

なんていうわけで、みんな敬遠してしまう。「宗教はちよつと待つてくれ」ではないですよ。一番あなたの欲しがっているものは、実は無意識の中で一番欲しがっているものは本当の生命なんです。ちょうどいつも鼻から空気を吸っているでしょ。鼻から空気を吸わないでいられますか。これは身体が生命を慕っている根本衝動です。根源衝動です。我々の根源衝動は気を吸っている。それでなければ、心臓という時計が止まってしまう。これは生きた時計ですからね。スイスの時計は止まっても、あなた方の心臓の時計は止まらない。

我々の魂が本当に――今度は心臓の鼓動ではない――魂の鼓動が、魂の息吹が、魂の呼吸が本当の生命を慕うということを聖書は告げ知らせている。その現実を展開している。そのドラマをそこに繰り広げているのがこの聖書というものです。

六日間の、勉強であろうと、仕事であろうと、何であろうと、この第一日――この日曜日は第一日ですから――この第一日を本当に受けとつていくのと、いけないのとでもつて、この六日間に生きの差がついてしまう。そういうわけですから、何はさておき、来客なんかあったって、すっぱかして出てこなくてはいかん。



「今日はお客さんが来たので、集会にちよつと行けません」
なんて電話がかかってくる。とんでもない。そのお客を引つ張つて来ればいい。

「明日は試験がありますから、今度の日曜日は失礼します」

なんて言う学生がもしいたら、ダメだよそんなのは。私は翌日が試験であつても、必ず日曜は自ら守つて勉強はしなかった。そのかわり、月曜の朝2時か3時頃起きて勉強する。とにかく、それくらいの気合が欲しいわけです。

●即身即主

³ すぐめがすみかを得、

つばめがそのひなをいれる巢を得るように、

万軍の主、わが王、わが神よ、

あなたの祭壇のかたわらに

わがすまいを得させてください。

「私はあなたのいる所にいたい。あなたのいらつしやる所が即ち、私たちにとつては祭壇なのです」

と。神の在り給う所に我も在りたい。これは、旧約の世界ではやはりエルサレム中心の歌です。けれども、新約の角度から私たちがこれを読むときに、もちろん「あなた」というところの「万軍の主」という「主」はキリストである。ヘンデルのあの「メサイア」で、

「キング・オブ・キングス」(諸王の王)

「ゴッド・オブ・ゴッツ」(神々の神)

という。ここにもそんな言葉があるんだけど。即ち、キリストは霊界の王者でありまして、その霊界の王者の在るところ――これは天界ですよ、天界だけれども――この霊界の王者はいたる所に遍在する。どこにでもこの王者はくだつてくる。僕としてくだつてくる。かつて僕としてくだつて、自らを現した。今、私たちには今度は、聖霊としていつでもくだつて来てくださる。

そこでいや実には、「汝の住み給う所」とはいずこぞと。

「極楽は東にあらず西になし来た道さがせみんな身にあり」

という、この私たちの身の中にあるという。慕い求めているものは他にではなかった。実は、この自分のうちに聖霊の宮が既にでき上がつてしまつていた。与えられていたと。でありますので、

⁴ あなたの家に住み、

常にあなたをほめたたえる人はさいわいです。

この「さいわいである」は先にもつてこなくては。

「さいわいなるかな、汝の家に住み、常にあなたをほめたたえる者は」



と。

「さいわいなるかな、汝の居る所に居る者は」

と。我々は即ち、キリストを、神を内住させるところの家そのものに、幕屋そのものに、自らが成ること。パウロが「幕屋」という言葉をそういう意味で使ってます。我々自身が即ち、

「神の幕屋、キリストの幕屋、聖霊の幕屋」

です。一人びとりがそうであるし、こういう集まりがそうであるということです。これがいつか言いました、

「即身即主」

ということ。万軍の主をこの身このままわがうちに即せしめる。

天の万軍は、天界の万軍は立体的にある。私たちの今生きているところの空間は極めてそういった霊的立体性を持っている。「アブラハム、イサク、ヤコブ」というような過去の人物ではない。もちろん、過去に居ただけでも、今もお神のもとに生きている。万軍の中のメンバーの、強力なメンバーの人たちです。この「万軍の」と言うときに、この聖書の人物、それからキリスト教において本当に福音のために倒れていった、証していった人たち、これが万軍です。この万軍の主。

でありますので、どれほど普通のいわゆるクリスチャンに除け者にされようと、一向差し支えない。本ものの群の中に既に地上にあつて加えられる。これは空元氣でも何でもない。本当にそうです。

皆さん、どうぞ、何か寂しくなったり、いろいろなことがありましたら、「万軍の主」というこの言葉を思いだして身につけてください。わが友はパウロさん、ヨハネさんであつたと。今もお生きてありたもうところのパウロであり、ヨハネであり、ペテロである。キリストに在つて自由に彼らと友である。使徒たちを何か偉いものであるなんて思ったら、とんでもない間違いですから。みんな兄弟姉妹です。

使徒行伝にも書いてあるとおり、パウロやペテロが何か神さまのように拝まれようとしたら、

「とんでもない、我も人なり」

と言った。我も罪びとなり、贖われたる罪びとにすぎないんだぞと。そういうことです。パウロは、

「我は罪びとの首なり」
かしら

と言った。そういう相対的な判断を突き抜けたところの現実において、兄弟という意識、姉妹という意識を我々は、地上にあらうと天上にあらうと、等しく持っていない。そういう現実を一番奥に持つていなければ、いろんな運命環境でもってグラグラする。



●わが力はなんじにあり

5その力があなたにあり、

その心がシオンの大路おおじにある人はさいわいです。

6彼らはバカの谷を通つても、

そこを泉のある所とします。

また前の雨は池をもつてそこをおおいます。

7彼らは力から力に進み、

シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。

8万軍の神、主よ、わが祈をおきください。

ヤコブの神よ、耳を傾けてください。

この詩篇の一番の中心は今読んだところの第二段階のところですよ。こういうところを読むと、もう何とも言えないですよ。口語訳ではやはりうまくないけれども。文語訳では、

「5その力なんじにあり、その心シオンの大路おおじにある者はさいわいなり。

文語でも、

「さいわいなるかな、その力なんじにあり、その心シオンの大路おおじにある者」

とひっくり返さなくてはいいかん。

6かれらは涙の谷をすぐれども其処をおおくの泉あるところとなす。また前の雨はもろもろの恵をもて之をおおえり。

7かれらは力より力にすすみ、遂におのおのシオンにいたりて神にまみゆ。」

これは「神にまみゆ」でいいんですよ、「神にまみえるでしょう」なんて訳されたら、もうがっかりしてしまうよ。「でしよう」なんていうのは消してしまった方がいい。

「その力なんじにあり」

と。短い言葉ですが、非常に力強い言葉です。私の力は私にないんですよ。まあ、元氣のあるときは、力があるなんて思っているさ。それは相対的な力にすぎない。

「本当の力は汝にあり」

と。私たちにとって、「汝」とはキリストに決まっている。ルターという人は、旧約聖書の註解であろうと、しょっちゅうキリストが出てくる。全くキリスト中心に彼はつかまえている。「その力なんじにあり」は、今度は「その」でなくていい。

「わが力なんじにあり」

という。

「ああ、我はさいわいなるかな、わが力はなんじにあり」

と。「主さま！」と呼んだ時に、同時に力が臨んでくるような呼び方をしなかったら、これは呼んでいるのではない。



●祈りは「主さま、アーメン」

祈りは極めて簡単でいい。

「主さま、アーメン」

で、ちゃんとした祈りです。

「万軍の主よ、アーメン、ハレルヤ！」

と。それで祈りですよ。何か神学的な説明をしているような祈りはごめんこうむる。神さまの方で、

「そんなのはもうごめんだ。簡単率直に話そうじゃないか」

と言うわけです。とにかく、祈りを聞いていて、お互いに本当に力より力へ、恵みより恵みへ、讃美より讃美へと、グングンとのぼっていく、そういう祈りでなくては。始めは苦しくて何でもいいですよ。詩篇もそうなんだ。始めは、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

なんて始まっている詩篇もある。そうかと思うと、終りの方へいくと讃美している。とにかく、メソメソした祈りはいかんですよ。始めはメソついていたっていいけれども、必ず終りは、力を受けとっていけば必ずそれは凱歌になる。どんな現実においても。いかなる環境運命でも絶対にこれに負けない現実を展開していくのでなかったら、信仰ではない。

「そのうちになるでしょう」

ではない。今はどんな具体的なダメなところにいようと、

「どつこいそれにもかかわらず、こういうところに私はいますよ」

ということの言える現実を身につけていなかったら。人間の生活にはいろんな波風が吹くけれども、波のまにまに揺れながら、実は北を指して進むような人になっていかないと。

白波を蹴立てて私たちは進んでいきます。今年から。だいたい痛いことを言うかもしれないけれども、しかし、すべて愛すればこそその言動と違っていただきたい。というのは、もういい加減なことでの世の中を本当に勝利していくわけにいかんですよ。ところが、何も心配はいらん。我々は強い必要はない。パウロが実に、

「我弱きときに強し」

と言ったと同じことで、自分の弱さに徹して、自分なんか当てにしない。自分なんか当てにしないでしょ。当てにするのはキリストだけです。

「わが力なんじにあり」

と。こういう言葉が、声が――喉からの声ではしょうがないわけだ――魂の、はらわたからの魂の声として、皆さんが祈らなくては。もし、祈りが浮いてしまったら、パツとやめればいい。ああ頭で祈っているなと思ったら、やめてしまおう。そして、もう一辺今度は、

「主さまー」

とはらわたから呼んで、

「アーメン！」

で、それでいい。頭に浮いてしまった祈りをごまかしたらダメですよ。それを日常生活でなさっていらつしやれば、この「即する」ことができる。即身の世界。即身でないものはみんなウソツぽちで、

「空くうの空なるかな、すべて空なり」

ということですよ。

●神との霊交

⁵その力があなたにあり、

その心がシオンの大路おおじにある人はさいわいです。

「その心がシオンの大路おおじにある者はさいわいなり」

と書いてあるけれども、「シオン」という言葉はない。「大路」といえばもう「シオンの大路」に決まっているから。我々にとつては「大道無門」の、

「その心が天の大道にある者はさいわいなり」

ということ。黙示録の終りの方に出てくるようなところですよ。黙示録22章に、「都の大通り」なんて書いてある。この「大路」というのを、ある学者は「信頼」と訳す。ちよつとヘブライ語を読み替えると、そう読めるんですが。

「その心に信頼ある人はさいわいだ」

と。「その力があなたにあり、その心に信頼ある者は」と。なるほど、そう言えば、ちよつとそれが対をなして、いいとも考えられますが、まあそこまで読まなくてもいいでしょう。

⁶彼らはバカの谷を通つても、

そこを泉のある所とします。

また前の雨は池をもつてそこをおおいます。

その「大路」とあつて、その次に「バーカーの谷」なんていう言葉がある。「バーカー」という字は、発音でいうと、同じ「バーカー」でもちよつと子音を代えると「涙」という字になる。そこで「涙の谷」という訳になつてしまつたわけだ。どうも本来この「バーカー」というのは、水の渴いたような谷に生えるところの木があつて、その葉をちぎると、そこから滴が出て涙のように垂れるというところから、「涙」と言つたのかもしれない。よくわからぬ。とにかく、非常に渴いたバーカーの木しか生えないような、そういった谷をも泉の湧き出でる所にするという。ルターは「悩みの谷」と訳している。「悩みの谷」という言葉はホセア書にもある。ホセア書2章15節、「アコルの谷」という言葉です。

「¹⁴斯るがゆえに我かれを誘いて荒野にみちびきいり終ついにかれの心をなぐさ

め、¹⁵かしこを出るや直ちにわれかれにその葡萄園を与え、アコルなやみ（患難）の谷を望みの門となして与えん。彼は若かりし時のごとくエジプトの国より上



りきたりし時のごとくかしこにて歌うたわん。」(ホセア2・14～15)
という。そういう、人生は悩み多し、涙多しと。

この頃、二三人の人が癌で亡くなつてしまつて、昨日もお葬式に行つてきたんだけど。どうもいろいろ悲しいことが起きてくる。あるいは、「死の陰の谷」なんていう言葉も詩篇23篇にある。死の陰だとか、患難だとか、涙とか。そういったものも、渴いた所も、カラカラの所も、泉のある所とする。イスラエルでは非常に泉が、水が大事なわけです。水が乏しいですから。大変です、泉の奪い合いなんてのが昔はあったらしい。

「汝はわが泉であるぞ」と、詩篇にも書いてある。

「汝のはらわたから生命の水が泉のごとく湧き出でる」(ヨハネ4・14)

とある。だから、神の生命、神の霊、それをこの「泉」という言葉で言われているわけです。また前の雨は池をもつてそこをおおいます。

「前の雨」というのは、イスラエルでは晩秋11月頃に降る雨です。イスラエルは大体、三分の二年位は亜熱帯状態ですから、この雨が降ったあとに種まきをして、どしどし伸びてくるわけです。非常に大事な雨のことです。これは春でなく秋なんです。

雨とか、泉とかいうことはもちろん、魂を潤す、また生命の――私たちは断食しても水だけは飲まなければもたない。食物は食わなくても空気と水は絶対に必要である――そういう意味において、水は霊に例えられるわけです。神の、汝の力というのは結局、ここで具体的に「泉」とか「水」とか言われているところの事態は、もうひとつ掘り下げると、「神の霊」のことになるわけです。神霊をいただかなければ、神の霊を、御霊をいただかなかつたら力は来ないんです、力、力と言つたつて。「生くる」ということは、神との霊交を、霊の交わりをしなかったら、生くるということにならない。この詩篇は、実は霊的な深い交わりの、

「魂と心と身が神の霊をもつて生くる」

という、そういう角度を持つているところに非常に力があるわけです。

●力の使徒パウロ

7 彼らは力から力に進み、

シオンにおいて神々の神にまみえるでしょう。

そういった人たちは、力から力に進み、シオンにおいて神々の神に――「神々の神」という訳はヘブライ語にはない。これは七十人訳ギリシア語聖書に書いてある――神にまみえる。これは旧約だから、そういう書き方をしてあります。彼らは力から力に進むという。

そこで、私たちは特にこの「力」という言葉にもう一辺重点をおいて考えてみなくてはならないわけです。何となれば、新約でもつて力の人が誰であつたかという、これは



申すまでもなく、パウロである。パウロがどうしてもその力の使徒となったかという、復活のキリストの力にぶつ倒されたからです。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するか」

と。いきり立って、いわゆる自力の力を持っていたサウロをひっくり返した。目が見えず、耳が聞こえず、ものが言えずという事態に彼を追い込んでしまった。そして今度はまた、御霊の力をもってこれに按手をして、魂の目を覚まさせて、

「我が目より鱗のごときもの落ちたり」

と。これはキリストの力に屈服したわけです。キリストの御霊の力に屈服した。

そこで少し新約聖書を開きましょう。まず、ローマ書から。ローマ書のいたるところに出てきますけれども、1章16節、

「¹⁶我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、凡て信ずる者に救いを得させる神の力たればなり。」(ロマ1・16)

「何と言おうと一向差し支えない。この喜びの音信を、どう考えても、私は言わざるをえない。この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも、全世界の人たちに、すべてこれを受けとる者に救いを得させる神の力であるからだ」

と。

「福音は神の力である」

という。意味ではありませんよと。

「キリスト教とはどういうものですか？」

なんて、意味をいくら研究したってダメだ。

「福音が力として受けとられなかったらダメだぞ」

と。いいですか。だから、「聖書研究会」なんていうのはそもそも名前が間違っている。

「¹⁷神の義はその福音のうちに顕^{あらわ}れ、信仰より出でて信仰に進ましむ。」(ロマ1・17)

と。言い換えると、

「神の力より出でて神の力に進ましめる」

と言ってもいいくらいのもんです。何を信するんですか。神の力を受けとる、ことです、「信ずる」というのは。

「信受より信受へ」

と。これは具体的な内容は何かという、

「力より力へ、福音より福音へ」

と進んでいく。これは非常にはつきりした言葉です。



●聖霊の力の中にある希望

それから、ローマ書15章13節、

「¹³願くは希望の神、信仰より出づる凡ての喜びと平安とを汝らに満たしめ、

聖霊の能力によりて希望を豊かならしめ給わんことを。」(ロマ15・13)

「聖霊の能力にあつて希望を豊かならしめ給わんことを」

と、ここに「聖霊の能力」という言葉がはつきり書いてある。「聖霊の力にあつて」ということは「聖霊の力の中で」ということ。希望なんて言ったって、聖霊の力がなかったら、本当の希望にならない。19節にも書いてある。

「¹⁸我はキリストの異邦人を服わせん為に我を用いて言と業と、¹⁹また徴と不思議との能力、および聖霊の能力にて働き給いし事のほかは敢えて語らず、

……」(ロマ15・18、19)

という。みなこれは御霊の力の現象の面をもつて私は言うぞと。何となれば、パウロは現象にこだわっているのではない。現象をして現象たらしめるところの根源の力をパウロは実証せんとして言っているだけです。だから、

「聖霊の能力にて働き給いし事のほかは敢えて語らず」

と言う。パウロが聖書の他に語っていることを、パウロの説教を全部集めたらよほど大変なことになったと思います。ごく一部分ですよ、この聖書なんていうものは。

次に、コリント前書1章18節、

「¹⁸それ十字架の言は亡ぶる者には愚かなれど、救わるる我らには神の能力なり。」(コリント前1・18)

「十字架の言」というのは、「十字架という言」ですよ。キリストが十字架で私たちの罪を背負ってしまったのだから。我というしょうがないやつをキリストは背負ってしまったんですから。背負われてみて、もう完全に罪から、自我というやつからぬけて、私たちは超我の世界に入るわけだ。己を乗り越えていく、超我ということ。

「福音は亡ぶる者には愚かである」

と。「福音を愚かとする者は亡びる」と言ったっていい。福音を馬鹿げたものだと思うやつは亡びていく。ところが、この福音は力なんだから。喜びの音信という。何が喜びかというと、神の驚くべき生命を与える内容を持っているから。だから、これは力であります。その次に、

「²⁴召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも神の能力、また神の智慧たるキリストなり。」(コリント前1・24)

24節がはつきりしている。一体、「神の力」とは何かというと、これはキリストである。「神の智慧」はキリストである。「神の義」は何かというと、要するにみんなキリストです。キリストという具体的なものなんです。キリストという具体的な実在。これが力なので、力



というのは、パウロは絶対に観念を言っているのではない。「福音」と言ったって、喜びの音信そのものがキリストなんだ。キリストに來なければ、喜びの音信なんて言ったってしょうがない。「喜びの音信の内容は、第一にこれで、第二にこれで」なんて、いくら箇条書きにしたってダメです。

「喜びの音信は曰く言い難し、これただキリストのみ」と言う人が本当に喜びの音信をつかまえる。

福音書に來て、キリストにぶつかってくださいよ。彼自身が喜びの音信そのものだから。それで、それが神の義であり、神の愛であり、神の力であり、神の生命であり、神の智慧である。だから、何も難しいことはないですよ、パウロの言は。何か妙に難しくしてしまうからおかしなことになる。パウロはそんな理屈なんかを考えてものを言っていない。もう示されるままに、力に智慧に迫られて書いています。

コリント前書2章4節、

「⁴わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力との証明によりたり。⁵これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん為なり。」(コリント前2:4~5)

と。みんな力です。

●復活の力

私はちゃんとそういうところはみんなラインしてある。だから、人の聖書を見てもわからない。自分の聖書を見たら、ヒラヒラと開いてわかってしまう。あなた方は、七色の色鉛筆を買って、聖書をいろいろな色付けするといいですよ。「生命」なんていうと、私は大体緑色で印する。「光」なんていうと、黄色で横棒が引つ張つてある。「愛」とくれば赤くなるしね。とにかく、皆さん、聖書を自分の生命の延長としてくださいよ。「私は聖書に色を塗るのはいやだ」という人は、それでもいいけれども。無色透明で結構です(笑)。本当は無色透明なんだよな。無色透明だが、読んでいるうちにいろんな色が見えてきたら、これは最高ですよ。まだ塗っているうちはダメかもしれない(笑)。なにさま、私はつかまえない人間ですから。ひとつの概念で、

「小池はどういうことでどういうものである」

なんて言ったって、ダメですよそれは。

そういう力です。それから、コリント前書4章19節、

「¹⁹されど主の御意ならば速かに汝等にいたり、誇る者の言にはあらず、その能力を知らんとす。²⁰神の国は言にあらず、能力にあればなり。」(コリント前4:

19~20)

実力を本当に生きているかねと。力と言っても、腕力と思つてはいかん。生き生きとし



た生命を持っていることが「力」です。「生命」と言ってもいい。要するに言葉のあやではありません。

コリント後書4章7節、

「⁷我等この宝を土の器に有^もてり、これ優れて大いなる能力^{ちから}の我等より出^でずして神より出づることの顕^{あらわ}れんためなり。

と。だから、

⁸われら四方より患難を受^うくれども窮^せぜず、為^なん方つくれども希望^{のぞみ}を失^はわず、⁹責めらるれども棄^すてられず、倒^{たふ}さるれども亡^なびず、¹⁰常にイエスの死を我らの身に負^おう。これイエスの生命の我らの身にあらわれん為^ななり。」(コリント後4・7・10)

というのは、神の力に圧倒されて動いているから。

ある先生がね、

「小池さんとは背も体重も同じなのに、どうして小池さんはそんなに力があるのかね」

と言う。私は笑っていたんだけど。それはこういう秘密の力をいただいているからです。皆さんもそうです、この力は御霊が持っている力ですからね。

エペソ書1章19節、

「¹⁹神の大能^{いきおい}の勢威^{はたらき}の活動によりて信ずる我らに対する能力^{ちから}の極めて大いなるとを知らしめ給^{たま}わんことを願^{ねが}う。」(エペソ1・19)

これはオールマイティな力です。3章7節、

「⁷我はその福音^{えきしや}の役者^{えきしや}とせらる。これ神の能力^{ちから}の活動に随^{したが}いて我に賜^{たま}う恵みの賜物によるなり。」(エペソ3・7)

神の力の働き、キリストの力の働きによつて賜^{たま}う恵みの賜物を、霊的ないろんな賜物をパウロは持っている。4章23節、これは力ではないんだけど、

「²³心の霊を新^{あらた}たにし、²⁴真理^{まこと}より出づる義と聖とにて、神に象^{かたど}り造^{つく}られたる新しき人を著^きるべきことなり。」(エペソ4・23・24)

この「新しき人」となると、力が与えられる。いや、実に力をいただければ、新しき人となるわけです。これは新人となってしまう。この力は、生まれ変わります。パウロは完全に生まれ変わってしまったからね。

ピリピ書3章10節に、「復活の力」という言がある。これは新しくなるから。

「¹⁰キリストとその復活^{よみがえり}の力を知り、又その死に効^ないて彼の苦難にあずかり、」(ピリピ3・10)

とある。キリストとその復活の力。キリストは神の力で甦^{よみがえ}りましたから。霊体を着て現われた。これは神の霊の力です。海の上を渡って行ったって何をしたらって、彼の業は全部――



―言も業も全部―神の「エネルギーヤ」(力)によって動いていた。御霊のエネルギーヤです。

コロサイ書1章29節、

「²⁹われ之がために我が衷^{うち}に能力^{ちから}をもて働き給うものの活動^{はたらき}にしたがい、能力^{ちから}を尽して労するなり。」(コロサイ1・29)

テサロニケ前書1章5節、

「⁵それ我らの福音の汝らに至りしは、言にのみ由らず、能力^{ちから}と聖霊と大なる確信とに由れり。且われらが汝らの中にありて汝らの為に如何なる行為をなししかは、汝らの知る所なり。」(テサロニケ前1・5)

「能力^{ちから}と聖霊」と分けてあるようだけれども、これはもう一つなんです。「聖霊の力」というのと同じことです。

●救い上げていく力

いくらでもまだテモテ書、テトス書、ヘブル書にも出ているが、まあいいでしょう。そういうわけで、なにもパウロに限らない。パウロが特にキリストのエネルギーを本当にいだいて、あのコリント後書11章に書いてあるような諸々の患難を突破していった。これは聖霊の力がなかったら、この生命力がなかったら、とうてい為し得ないことである。ヨハネにおきましてもそうです。ペテロにおいてもそうです。

しかも、その力は結局どういう力かと。ただ能力があるだけではなくて、この力は相手を救うところの力です。相手を担いあげ、救い上げていくところの力。ただ力を誇示するための力ではありません。福音的な力というものは必ず相手を幸いにするところの、相手を救い上げていくところの、そういう力がこの福音的な力です。

サタン的な力もありますよ、いろんな霊がいますから、なかなか力を持てますよ。呪うやつがあると、呪いの力があるから、藁人形なんかを刺すと、呪われている人が

「痛い、痛い」

なんて言い出す。

「どうしたんですか？」

と聞くと、

「藁人形で呪われていますー!」

と言うから、私はキリストに祈ってあげたら、だんだん抜けていった。

「先生、だんだん抜けていきます」

と。呪っているやつが、今度は逆に倒れてしまう。

キリストはどのような霊よりも力強いですから、何も恐いことはない。相手を本当に救い上げていく力です。もうひとつ別な言葉でいうと、愛の力です。究極の意味において、



この愛を持ったところの力が聖霊の力である。

「神の力はかくかくでいふる」

と誇示する力ではなくして、神の力が現われるところは必ず人を幸いにしていくところのものがそこに、何らかの意味において、現じているわけです。その力にぶつかると、何かしらんが、ぶつかった人がうれしくなる。力強くなっていく。涙が渴いていく。悲しみが喜びに変えられていく。そういう力です。

そこまでの詩篇は書いてないけれども、我々の神の生命というものは人を生命せしめるところの力である。そういう力ならいくらでもいただきたいではないですか。

「力、力というけれども、そんな力強い人になりたくない」

なんて、冗談じゃない。こちらは弱くてよろしい。何もなくて、無力である。キリストが言ったでしょ、

「私は何もできない」

と。「何もできない」と言っていたキリストが一切を為していた。これは即ち神一切。私たちにとっては、「キリスト一切」ということにおいて然りと。自分も、自分のいろんな癖やいろんなことにも、この力で打ち勝って進んでいく。そうすると、自分自身が――人間というものはいろんな欠点や癖を持っているから――それに打ち勝っていく。自我の強い人も、そいつに打ち勝って逆にその強さを、人を幸いにする方に持つていく。それをやったのがこのパウロという人ですよ。

とにかく、すべてマイナス的なものを逆にプラスに変質変貌させて、自他共に幸いにしていくようなものがこの神の力である。そういう力なら無量でありまして、いくらでもいただいて、これでいいなんていうところはありはしきです。死に至るまでこの力の作用するものとされて進んでいくだけの人はなし。これがまた楽しくてしょうがない。なぜ楽しいかという、自己満足ではない。人を本当に救いあげていくから、喜びを与えていくから、楽しいのであります。人ひとりの人が聖霊によってひっくり返されて、福音を喜ぶ姿を見るにまさって、私はうれしいことはない。ある人が「非常に成功した」だとか何とかということもうれしいでしょうけれども、それよりも、

「一番最大の喜びは、キリストの霊の本当に即身している人間となること」

です。我々が、もし、地上でこれだけの仕事をしていかなければならないと責められたら、やりきれませんですわ。私もなるほど野心を持っています、聖なる野心を。けれどもそれは、

「いつどこでぶつ倒れても、アーメン・ハレルヤ！の気持を持っている」

ことです。だから、あせらないわけです。未完成の完成の日を知っているから。神さまは、そのキリストの福音に即した願いならば、絶対に受けとってくださいるから。もう、人間の批評なんかどうでもいい。自分の仕事の成敗、これもどうでもいい。であるからこそ、質的な本ものが必ず現われていく。



そういう動き方で私たちは進んで行きたい。これは万人に共通な願いであり、一番根源的な願いであると思う。そしてまた本当に叶えられる願いだと思う。そうでないものは、どんなに成功のように見えても、実はそれは本当の成功ではない。そうであるなら、どんなにそれが失敗に見えても本当の勝利である。こういう人生を私たちは正直送っているんだ。勝利とは何か。神の栄光が人知れずそこに表れているものを勝利という。

●油そそがれたる者

9 神よ、われらの盾^{たて}をみそなわし、

あなたの油そそがれた者の顔をかえりみてください。

この9節は注目しなければいかん。「盾」というのは、そのあとで神さまのことを「盾」という言い方もしている。「あなたの油そそがれた者」というのは誰かというと、実はこの詩人自身のことであるとみるのが本当だと思います。

「あなたの油そそがれた者を、この私の顔をかえりみてください。私はあなたに油そそがれたる者です」

と。聖霊のバプテスマを受けた者は、「油そそがれたる者」という意味なんです。「油そそがれたる者」のギリシア語は「クリストス」、ヘブライ語は「マーシアッハ」。「このメシヤを」ということだ。私たちはメシヤなんです。「メシヤ」というのはキリストだけかと思つたら――特別に「メシヤ」というのはキリストのことだけれども――本来は、私たちはキリストなんだ。「クリストス」です。「キリスト者」なんて言う必要はない。キリストなんだ。この「油そそがれたる者」という言葉の本来の意味では、「クリストス」であり、「メシヤ」である。

「このキリストを、このメシヤをかえりみてください」

と。もうそうなつたら、どうしたつてこの即主でなければ、即身、即主でなかったら、「このメシヤを」なんて言えませんか。

「このメシヤをかえりみてください。この油そそがれたる者を、どうぞ、お願みください」

と。これでもうはつきりする。

「油そそがれざる者はキリスト者にあらず。聖霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

と、パウロがローマ書8章でちゃんと言っているんだから。

さつきから、「力、力」と申しました。それは結局、救いの力であり、愛の力である。しかしそれは何であるか。それは聖霊である。御霊である。だから、「力より力に進み」ということは、

「御霊より御霊へと展開し」



と言つたつてかまわない。

●キリストの砕けを賜る

祈りの中で常に新たに自分自身を投げかけていく。自分そのものを投げかけることを「砕け」といんです。砕けというのは、なにか

「自分の気持ちが固いのを砕いてからでなくては神の前に出られない」

と思つたら大間違いですよ。砕けというのは、自分そのものを、その心とその魂とその身全体を、キリストの中に砕け落ちること。あるがままに投げかける、投げ捨てること、あるがままにキリストの中にどつかりと自分を投げ入れること。これを

「
砕け
」

というんです。そうしたら、実はキリストの十字架という砕け、その中に入ってしまったっているわけです。なぜ投げかけられるかというと、十字架という門を通って投げかけるんだから。だから、キリストの砕けの中に入って、キリストの砕けを賜うわけです。キリストの砕けです。

「われは何ものにもあらず」

と言つて神さまの前に平伏している姿、これがキリストの碎けです。これを賜る。その賜つた世界が即ちもう既に聖霊の世界なんです。「聖霊」なんて言つたつて何も難しいことはない。あるがままの自分を碎けていく、そこに投げかけていくと、向こうの碎けの力で今度は碎かれていくんですよ。向こうの碎けの力で碎かれていく。自分で碎けていくのではない。人間的に自分で碎けることも多少はありましようよ。しかし、そんなものは当てにならない。すぐまたダメになる。もとのもくあみです。何回やつても同じことです。くたびれてしまつて、終いには

「もうよそう」

なんていうことになる。

そういう砕けを、キリストの砕けを賜る。そうすると、それが本当の玉砕ということになる。そうすると今度は、玉成していく。玉と成る。キリストによつて玉砕されれば、玉成していく。この玉成していく姿が即ち、聖霊の姿なんです。

「芥子種一粒」

というやつがある。これが展開する。核分裂をしていく——まあ今の言葉でいうとね——
 本当のアトムなんだ。もうこれを砕くことができないところの素晴らしいものがここに出
 てくる。それはいわゆる原子力よりか凄い原始力です。本当の原始力です。この原始力が
 力なんです。力より力に進むという。

この御霊をそのようにして受けとる。自分を投げかけてみたら、あるがままの自分です。いつまでもあるのではない。あるがままの自分は千変万化している。昨日の我は今日の我



ではない。明日の我はまた今日の我にあらざりというような、進んでやまない。だから、諺にもあるでしょ、

「人はその棺を負うまでは批評してはいかん」

と。どうのこうのと人間のことを言っではいかんと。棺を負ってもなおどっこい、向こうの世界へ行ってからどんどん展開していますから、棺を負ってもダメだよな、本当は。

「死してなおのち止まず」

という。始末のわるい人間です、私は。

そういうようなのが、このキリストによつて玉成されつつあるところの、御霊によつて玉成されつつあるところの、絶対に後退しないところの、滑つても転んでも倒れても躓いても前進してやまざるところの、実存がこの聖霊によつて展開していく。

「なんとまあありがたいことだなあ、福音は本当に力だなあ」

と、言わざるをえないじゃないですか。なんともう他の力と比べられないと。ソ連のものの凄惨な武力が来ようと、こちらの肉体が原子爆弾で飛び散ろうと、どっこいというものを持っている。そのどっこいというものを持っていなかったら、それは人生はつまらんですよ。すべて空になつてしまう。そういう、何とも言えないところの、力より力へ、信仰より信仰へ、恵みより恵みへ、希望より希望へと――みんな同じことです、この言葉は全部――進んで行きます。

●現在を永遠として

10 あなたの大庭にいる一日は、

よそにいる千日にもまさるのです。

神を内住せしめているところの一日は千日にもまさる。内村先生が『一日一生』というのを書いたね。この一日を一生とする。ペテロもペテロ後書3章で、

「二日は千年のごとく、千年は一日のごとし」

と言った。

「愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、

千年は一日のごとし。

なぜ、こういうことを言うでしょうね、

「もう永遠だよ。一日も千年のごとく千年も一日のごとし」と。

9 主その約束を果たすに遅きは、或人の遅しと思うがごときにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、

本願は万人救済にあるからと言うんです。

凡ての人の悔改に至らんことを望みて、汝らを永く忍び給うなり。10 されど主の日は盗人のごとく来らん、その日には天とどろきて去り、もろもろの天



体は焼け崩れ、地とそこにある工^{わざ}とは焼け尽きん。」（ペテロ後3:8〜10）
大いなる天変地異がきて、新天新地がやって来るぞと。新しい義の住むところの新天新地がやって来ると。

「日日好日」

なんていう言葉があるね、実篤さんも好きな言葉だ。毎日毎日がこれ好^よき日であると。本当に御霊を内住しているところの一日一日は掛け替えのない一日一日として展開していく。そういうわけで、

「汝を内住せしめているところの一日が即ち永遠である」

と言っている。私たちは永遠を生きているんだ。現在を永遠として生きている。なにか時の永きを永遠と言っているのではない。質的なものですから。

わたしは悪の天幕にいるよりは、

むしろ、わが神の家の門守^{かどもり}となることを願います。

11主なる神は日です、盾^{たて}です。

「主なる神は日である」と書いてある。神さまのことを太陽に例えたのは聖書の中でここ一か所だけです。いわゆる太陽神なんていうやつがあるものだから、それとごっちゃにされる困るから、多分ひかえて言わなかったんでしょう。しかし、「神は光」というようなことは言っている。我々が光と意識するのは何によって意識するのか。お天道さんによつてだ。お天道さんがなかったら、光なんていうことを意識なんかしない。光の实体は正直、我々にとつて太陽にある。だから、あるときは「神は太陽」と言つたつてわるくはない。

「キリストは義の太陽」

と言われたり、あるいは、

「明けの明星」

なんて言われたりする。それから、サタンに対して守る「盾」であると。盾も日の光を浴びて、パツと光るから、相手は目が眩んでしまう。そういう盾の使い方もある。昔の戦争でそれをやった。もの凄く盾の表をピカピカに光らしておく、相手の目がくらんでしまう。

主は恵みと誉^{ほまれ}とを与え、

直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。

ルカ伝によると、「善きもの」は聖霊のことです。

12万軍の主よ、あなたに信頼する人はさいわいです。

「幸いなるかな、汝により頼む者」

と。「汝により頼む」というと、なにか精神的なことだと思っているが、「より頼む」というのはさっき言った、「汝の中に碎けかかる者は」と言つたらいい。

「汝の中に碎けかかつていく者は、自分を投身する者は、幸いなり」



と。私はそう訳してやるかな。「より頼む」なんて言うと、なにか観念化してしまうから。

●人、信なくば立たず

これが、84篇という詩篇が私たちにキリストの光をもつて与えてくれるところの真理内容であり、力そのものである。どうぞ、この力をいよいよ、御霊を宿し、御霊をいただくことによって――力とは即ち御霊でありますから――この年を勇ましく喜ばしく進んで行きましょう。病んで寝ている人があったり、いろいろ、だいぶ風邪もはやっているようだが、按手して深く祈って、相手を燃焼させてあげなくてはいけませんよ。そうしたら、風邪もすっ飛んでいってしまうから。お互いにそれをやって助けてください。人間というのは具体的なもの、思われている世界ではどうにもなりませんよ。思われたり、考えられている世界ではない。

「我思つゆえに我あり」

なんて、とんでもない間違いを言ったな、デカルトの奴は。むしろ、ゲエテの方がまだいい。

「ゲフュール・イスト・アツレス」（体感は一切なり）

という。あの「ゲフュール」というのは「感情」ではない。

「本当に身体で感ずることが一切である」

と。本当にそうです。

「すべて全存在的に受けとることでなければダメだ」

ということ。どうぞ、体裁はやめて、本もので行きましょう。そして、どうぞ、そういった本ものの世界を進んでいく。そして、左顧右眄は要らず、相対的な判断は要らず、主にあつてお互いに本当に主におけるところの御霊における信をもつて――人間というのはいろんな心が動いたり、さまざまなことになるさ。そんなものをいちいち気にしていたらどうにもならんよ――それをもうひとつ奥の世界から線の太い信を貫く。

「人、信なくば立たず」

という。

「人間は信がなければ立たないぞ。神を本当に受けとることなくば、人、信なくば

立たず。どうにもならん」

と。私たちが「霊的」と言うときには、この聖霊においてのことを霊的と言うので、いわゆる心霊的ということではない。ごっちゃにしないように。そういった意味における霊的な御霊の事態、福音の一切をその中に持っている内容を持ったところの事態。私たちは、そういった霊的人格といよいよよされて、この神の栄光の現象体になりたい。そういう気持ちをもつてこの年頭から――いわゆる人間的なはりきりではなくて――いよいよ進んで行きたいと念願する事態であります。

